

再発見・牛久第十七話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

小川(芋銭)家系譜⑩

佐々木・木村・小川

牛久沼が小川芋銭の

芸術を育んだ

牛久沼と

文人墨客・彫刻家・作詩家

牛久沼が、小川芋銭の芸術を育んだ。芋銭芸術は、書、短歌、俳句、絵画(新南画・俳画)にジャンル分けすることができるが、絵画の面においては独自性と風格に富んだ作品を生みだしている。

住井すゑは、牛久沼のほとりの自宅で大河小説「橋のない川」を書きおろし、「牛久沼のほとり」というタイトルのエッセーを書くなど作家活動を続けた。

池波正太郎の歴史小説鬼平犯科帳・雲竜剣に牛久沼の条があるが、テレビドラマのなかでは中村吉右衛門扮する火盗改長谷川平蔵の台詞に「牛久沼が出てくる」。

現在では、彫刻家一色邦彦と作

詩家中島清治が牛久沼のほとりに居(アトリエ)を構えて創作活動を続けている。

牛久沼と短歌

小川芋銭は、水戸の杉田雨人を通じて小杉放庵画伯と親しくなり、同画伯の紹介により東京の2、3の雑誌に挿画を描いたことがあった。

放庵が芋銭を追想して詠んだ次の短歌がある。

牛久沼清淵芋銭大居士
の墓のほとりの藪椿かな
里川に遊ぶ子供らあの中
に芋銭が河童まじり居らずや

牛久沼と俳句

小川芋銭の代表作に、

五月雨や月夜に似たる沼明り

という俳句がある。この句碑が、昭和63年に牛久市によって牛久沼を見下ろす三日月橋生涯学習セン

ター構内に建てられた。文字は芋銭の自筆である。

正岡子規は、明治22年(1889年)4月4日に水戸への旅の途中、暫し牛久沼の二千間堤(土手)に立ち止まって次の句をよんだ。

寒さうに鳥のうきけり牛久沼

水原秋桜子しゅうおうしは岡田村大字柏田(現柏田町・町田家)に縁が深く、牛久沼を次のようによんでいる。

牛久沼あふれてせはし晩生刈

牛久沼で

見られる黒富士の詩

― 草野心平作 ―

牛久沼で、冬の空気の澄んだ日に、特に夕陽が沈むころ、雲魚亭から牛久沼越しに見える富士山は「牛久黒富士」と呼ばれている。

この黒富士を、昭和の初期に、草野心平(詩人。1903〜1988年)が詩に書いているのでその全文を写しておく。

牛久のはての。
はるかのはての山脈の。
その山脈からいちだん高く。
黒富士。

大いなる。
はるか。
黒富士。

さくらんぼ色はだんだん沈み。
上天に。

金隈取の。
雲一点。

〈存在を超えた無限なもの。〉
〈存在に還へる無限なもの。〉

祈りの如き。

はるか。

黒富士。

※詩文は『ふるさと点描』(昭和58年・楳エリート情報社刊)から引用



牛久沼(大正時代1912~1926年に撮影されたもの)